

とはすがたりにおける希望表現について

柴田 昭二
連 仲 友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿⁽¹⁾を受け、とはすがたりを研究資料として、それにおける希望表現⁽²⁾の実態を説明しようとするものである。

『日本古典文学大辞典⁽³⁾』などによると、とはすがたり（以下「本書」と略する）は後深草院二条とよばれた女性の自伝的文学であり、全五巻よりなる。成立は正和二（一一三三）年一月一七日以前、記事最終の嘉元四（一一三〇六）年をさほど下らないころとされる。全体は前編三巻と後編二巻に分けられ、その間に足掛け五年の空白がある。前編は宮廷篇あるいは愛欲篇と呼ぶことがあり、作者一四歳から二八歳までの後深草院御所での宮仕え生活と愛の遍歴を綴る。後編は紀行篇あるいは修行篇と呼ぶことがあり、念願の出家を遂げた作者が三二歳から四九歳まで西行に倣って修行に出る旅の記録を中心に記す。全編を通してその内容に仏教的な考え方が強く感じとれる。作者の体験した事実に加え、創作した虚構と相まって、日記文学、物語文学及び紀行文学の要素が含まれる。先行作品から多くを吸収し、とりわけ源氏物語の影響がもつとも濃厚である。その文体は基本的に和文体であり、平安朝女流文学の流れの末流に位置づけられるが、漢文体の仏経と偈文の引用及び一六二首の和歌が挿入され、多様性が備わっている。

テキストには、三角洋一校注『とはすがたり』（岩波書店 新日本古典文学大系50 一九九四年三月第一刷）を用いる。その底本は江戸中期の書写になる孤本

とはすがたりにおける希望表現について

の宮内庁書陵部蔵御所本である。本文作成に際し、底本の仮名書きに漢字を宛て、もとの仮名を振り仮名にしている。漢字書きに校注者の付けた読み仮名に（ ）を施している。

二、希望表現の構成形式

「本書」における希望表現と認められる構成形式とそれぞれの用例数は以下の通りである。

「まほし」	(五例)
「たし」	(二五例)
「ばや」	(一〇例)
「(も) がな」	(七例)
「なむ」	(一例)
「ほし」	(一例)
「欲」	(一例)
「願」	(三四例)
「ねがふ」	(三例)
「のぞむ」	(六例)
「いのる」	(一九例)
「こふ」	(五例)
「もとむ」	(三例)

以上から見られるように、助動詞では類義の助動詞「まほし」と「たし」がともに用いられるが、量的に「たし」が「まほし」の倍以上ある。終助詞では「ばや」

「(も) がな」「なむ」が見られ、「ばや」がもつとも多い。形容詞「ほし」が見られるが、その用例数は少ない。漢文語法の助動詞「欲」が一例のみ見られ、漢語名詞「願」が多数見られる。動詞では「ねがふ」「のぞむ」「いのる」「こふ」「もとむ」が見られ、そのうち一部に音読みの熟語形式が含まれる。

前述した通り、本書は前編と後編とで場面や内容が異なるうえ、その間五年間の空白があるが、希望表現の構成に限っていえば、「ばや」は全用例一〇例のうち前編に九例、後編に一例、「(も) がな」は全用例七例のうち前編に六例、後編に一例、漢語名詞「願」は全用例三四例のうち前編に一四例、後編に二〇例という分布上の偏りが見られるが、その他の構成形式の分布は前編と後編の間に目立った偏りは認められない。

三、各形式の用法

1、「まほし」の用法

まず、「まほし」の用法を見る。本書に「まほし」は五例見られ、そのうち派生語「まほしげなり」が一例含まれる。また、すべての用例は地の文に用いられている。

- (1) 行平の中納言、藻塩垂れつ、わびける住まひも、いづくのほどにかと、吹き越す風にも問はまほし。
(巻五 二二三頁)

例 (1) は地の文の文末における終止形の用例である。「関を越えて吹く風にも尋ねたい。」の意と解され、希望表現の下位分類の「願望⁽⁴⁾」を「表出⁽⁵⁾」する用法である。

- (2) 又二度その面影見ざりしこそ。「さらば、などや今一目も」と言はまほしけれども、中くなれば、物は言はねど、袖の涙はしるかりけるにや、
(巻一 五〇頁)

- (3) 「いづくより参りたる者ぞ」と仰せあれば、過ぎにし昔より語り申さまほしけれども、「奈良の方よりにて候」と申。
(巻五 二四三頁)

- (4) 月いと明く差し出たる物から、木陰は暗き中に、鹿のたゝすみありきたる

など、絵に描きとめまほしきに、寺の初夜の鐘、たゞ今うちつゝきたるに、
(巻二 一九八頁)

例 (2) (3) (4) は地の文の従属節における用例である。「どうしてもう一日あの子の顔を見せてくださらなかったのですか、と言いたいのだが」「過去に遡って説明したいと思いましたが、」「木陰の薄暗い中、鹿が佇んだり歩いたりしている様子を、絵に描きとめておきたい思いのなかで、」の意と解され、いずれも「願望」を「説明⁽⁶⁾」する用法である。

- (5) まづ新宮に参りたれば、山田の原の杉の群立ち、ほと、ぎすの初音を待たん便りも、「こゝを瀬にせん」と語らはまほしげなり。
(巻四 一九八頁)

例 (5) は地の文の文末における用例である。接尾語「げ」がついた形容動詞の派生語であり、「ここで杜鵑の初音を待ちましよう」と話しかけたそうだ。」の意と解され、外から見える「願望」を「説明」する用法である。

2、「たし」の用法

次に、「たし」の用法を見る。本書に「たし」は一五例見られ、そのうち派生語「たさ」が一例、「たがる」が二例含まれる。また、地の文に一三例、会話文に二例用いられるが、和歌中の用例が見られない。

- (6) 道のほどの名所なども、やすらひ見たかりしかども、大勢に引き具せられて事しげかりしかば、何となく過ぎにしを、思ひのほかにむつかしければ、
(巻四 一八五頁)

- (7) 五部の大乗経の宿願、残り多く侍るを、この国にて、又少し書きまいらせたくて、とかく思ひめぐらして、松山いたく遠からぬほどに、小さき庵室を訪ね出だして、道場に定め、懺法、正さむ花など始む。
(巻五 二二八頁)

例 (6) (7) は地の文における用例である。「道中の名所をゆっくり見たかったけれども、」「この国でまた少し写経したいと思って、」の意と解され、いずれも作者自身の「願望」を「説明」する用法である。

(8) 十日余りの頃にや、又使ひあり。「日を隔てずも申たきに、御所の御使など見合ひつゝ、頃とも知らでやおぼしめされんと、心のほかなる日数積もる」など言はるゝに、
(巻一 三三頁)

(9) 長月の中の十日余りにや、善勝寺の大納言のもとより、文こまやかに書きて、「申たき事あり。出でたまへ。」
(巻二 八五頁)

例 (8) は伝言文、例 (9) は書簡文における用例である。「毎日お便りを差し上げたいのに」、「申し上げたいことがあります。」の意と解され、いずれも第三者の「願望」を「説明」する用法である。

(10) 何くれと沙汰せらるゝこそ、我命の惜しさにはあらで、この身の事の行末の見たさにこそとおぼえしさま、罪深くこそとおぼえ侍。
(巻一 一二二頁)

例 (10) は地の文における用例である。接尾語「さ」がついた名詞の派生語であり、「自分の命の惜しさからではなく、私の行く末を見届けたい気持ちだと思ふにつけ、」の意と解され、第三者の「願望」を「説明」する用法である。

(11) 広沢の与三入道といふ者、熊野参りのつるに下るとて、家の中騒ぎ、村郡の営みなり。絹障子を張りて、絵を描きたがりし時に、何と思ひ分く事もなく、
(巻五 二二九頁)

(12) 「出雲路といふわたりに侍が、女どもの見参したがるが侍に、いかゞして。みづからの便りは、身に代へても」など申しを、
(巻二 八五頁)

例 (11) は地の文、例 (12) は書簡文における用例である。接尾語「がる」がついた派生語であり、「広沢の与三入道が絹張りの襖を仕立てて、そこに絵を描きたいと思っている時、」 「女たちがぜひあなたにお目にかかりたいと思っておりますが、」の意と解され、いずれも三人称の外から見える「願望」を「説明」する用法である。

前述した「まほし」は地の文において作者自身の「願望」を書き表す場合のみに用いられるのに対して、「たし」は地の文のほかに第三者の会話文や伝言文・書簡にも用いられ、用法が広がっている。

とはずがたりにおける希望表現について

3、「ばや」の用法

次に、「ばや」の用法を見る。本書に「ばや」は一〇例見られ、そのうち地の文に四例、会話文に一例、和歌に五例用いられる。

(13) 車さへ待つけたれば、これよりいづ方へも行隠れなばやと思へども、事柄もゆかしくて、二条町の兵衛卿の宿へ行ぬ。
(巻三 一五二頁)

(14) 「今一度人間に生を享けばやと思ひ定め、世の習ひいかにもならば、むなしき空に立ち昇らむ煙も、猶あたりは去らじ」など、まめやかにかはゆきはどに仰られて、
(巻三 一四一頁)

例 (13) は地の文、例 (14) は会話文における用例である。「どこかへ行つて身を隠したいと思うが、」 「もう一度人間に生を受けたいと思ひ定めて、」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

(15) 恐れくも、咎は上つ方より御使ひを下され候はばやとこそ、思ひて候へ。
(巻二 七二頁)

例 (15) は書簡文における用例である。「まことの咎が私にあるなら、御所様ご自身より直接お使いを下されたいと思っております。」の意と解され、希望表現の下位分類の「希求」を「表出」する用法である。

(16) 君だにもならはざりける有明の面影残る袖を見せばや
(巻一 四一頁)

(17) 杉の庵松の柱に篠簾垂憂き世の中をかけ離ればや
(巻四 一七四頁)

例 (16) (17) は和歌における用例である。「院の君さえもこのような暁の別れは経験ないとおっしゃいますが、私も薄明の中の面影がそのままとどまり、袖の涙に映っているさまをお見せしたいものです。」 「杉を葺いた庵、松の柱に篠の簾垂を懸けただけの粗末な住いであつても、辛い世の中からかけ離れたものだ。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

4、「も」がな」の用法

次に「(も) がな」の用法を見る。本書に「(も) がな」は七例見られ、そのうち地の文に三例、会話文に三例、和歌に一例用いられる。

- (18) たゞそのまゝにて、なり果てむさまをも見るわざもがなと思へども、限りあれば、四日の夜、神楽岡といふ山へ送り侍し。
(巻一 二八頁)

- (19) 差し出づるにつけても、憂き世に住まぬ身にもがななど、今さら山のあなたに急がる、心地のみするに、
(巻三 一二八頁)

例 (18) (19) は地の文における用例である。「いつまでも亡骸に付き添って、変わりはてる姿を見届けたいとも思ったが」「早くこんな辛い世を逃れて出家したいものだと、今更山中の静かな生活を急ぐ気持になります。」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

- (20) 「君に知られたてまつらぬわざもがな」と言ふ。
(巻一 四七頁)

- (21) 大方、「何とがな」ともてなすに、障子の絵を見て、「ゐ中にあるべしとおぼえぬ筆なり。いかなる人の描きたるぞ」と言ふに、
(巻五 二二〇頁)

例 (20) (21) は会話文における用例である。「何とかして御所様にこのことを秘密にしておく方法がほしい。」「何かもてなす品物がほしい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

- (22) 我袖の涙に宿る有明の明けてもおなじ面影もがな
(巻三 一二八頁)

例 (22) は和歌における用例である。「私の袖に映る有明の月は、夜が明けても同じように面影として宿ってほしいものだ。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

5、「なむ」の用法

次に、「なむ」の用法を見る。本書に「なむ」は一例のみ見られる。

- (23) 「又、御里居の隙をうかがひて、忍つゝ入おはしたる人もあらば、築地の崩れより、「うちも寝ななむ」とてもやあるらん。」
(巻一 三七頁)

例 (23) における「うちも寝ななむ」は伊勢物語の和歌「人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにうちも寝ななむ」の部分引用である。「少しの間でも眠っていてほしい。」の意と解され、他者に対する「希求」を「表出」する用法である。

6、「ほし」の用法

次に、「ほし」の用法を見る。本書に「ほし」は一例のみ見られる。

- (24) 見参して、事のやう語れば、「能は仇なる方もありけり。御能ゆへに、欲しく思ひまいらせて、申けるにこそ」と言ひて、
(巻五 二二二頁)

例 (24) は会話文における用例である。連歌の下句を意識した内容であり、「あなたの才能が優れているので、自分のところにほしいと思ってあのようなことを申しました。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

7、「欲」の用法

次に、「欲」の用法を見る。本書に「欲」は一例のみ見られる。

- (25) 「三界無安猶如火宅、一夜とゞまるべき身にしあらねども、欲知過去因つたなければ、かゝる憂き身を思ひ知る。」
(巻四 二〇八頁)

例 (25) における「欲知過去因」は三世因果経、諸経要集及び法苑珠林に載る偈「欲知過去因、見其現在果、欲知未来果、見其現在因。」「(過去の因を知らんと欲せば、其の現在の果を見るべし、未来の果を知らんと欲せば、其の現在の因を見るべし。)の部分引用である。本文では「過去因」の部分のみが下に続き、「欲知」は実態的な意味を持たないが、原文は「もし過去の因を知りたいならば、」

の意と解され、「欲」は漢文法でいう助動詞で「願望」を「説明」する用法である。

8、「願」の用法

次に、「願」の用法を見る。本書に「願」は三四例見られるが、そのうち漢語の熟語形式が多く、特に「宿願」が半数の一七例を占めている。

(26) 「我、九かいの色くづを救はんと思ふ願あり」とて、 (巻四 二〇三頁)

(27) 「二巻に一文字づつを加へて書きたるは、かならず下界にて、今一度契りを結ばんの大願なり。」 (巻三 一四一頁)

(28) 我宿願成就せましかば、むなくこの形見は人の家の宝となるべかりき。 (巻五 二三三頁)

例 (26) (27) (28) における「願」「大願」「宿願」のほかに「所願」「咒願」「願書」「願文」「結願」が見られるが、いずれも「神仏にかける願」の意を表す仏教用語としての、名詞用法である。

9、「ねがふ」の用法

次に、「ねがふ」の用法を見る。本書に「ねがふ」は三例見られる。

(29) 「世の常ならず、白き色なる九献を、時々願ふ事の侍を、かく名立たしく申なり」といらふ。 (巻一 三八頁)

(30) 「真実の道に入ても。常の願ひなれば」と思ふさへ、人の物言ひをも恐ろしければ、 (巻三 一四三頁)

例 (29) は、「他と違って、白酒を時々頼むことがあることをあのように大げさに言うのです。」の意を表し、「願ふ」は動詞用法である。例 (30) は、「いつも願っていることなのです。」の意を表し、「願ひ」は動詞連用形の名詞用法である。

とはずがたりにおける希望表現について

(31) 山のあなたの住まゐのみ願はしけれども、心にまかせぬなど思ふも、なを捨てがたきにこそと、 (巻三 一一五頁)

例 (31) は、「山奥に入って暮らすことばかり願いたいのに、」の意を表し、「願はし」は「ねがふ」の派生語の形容詞で、「願望」を「説明」する用法である。

10、「のぞむ」の用法

次に、「のぞむ」の用法を見る。本書に「のぞむ」は六例見られ、そのうち熟語「所望」が一例含まれる。

(32) 「たゞ九品の上なき位を望むばかりなるに、今宵の御樂は、上品蓮台のあか月の樂もかくやおぼえ、」 (巻三 一三三頁)

(33) 僧正、「今生の望みは残る所なし。」 (巻四 一九一頁)

例 (32) は、「ひたすら極楽浄土の最上位を望むのみですが、」の意を表し、「望む」は動詞用法である。例 (33) は、「この世で望むことはもう残りが無い。」の意を表し、「望み」は動詞連用形の名詞用法である。また、「望む」「望み」はいずれも神仏に関する希望を表す用法である。

(34) 女三宮の琴の代はりに、箏の琴を隆親の女の今参りに弾かせんに、隆親にとさら所望ありと聞くより、などやらん、むつかしくて、 (巻二 九三頁)

例 (34) は、「隆親が特別にお願いしたと聞くものの、」の意を表し、「所望」は熟語で神仏に関する希望でなく、一般的な希望を表す名詞用法である。

11、「いのる」の用法

次に、「いのる」の用法を見る。本書に「いのる」は一九例見られ、そのうち熟語「祈念」が一例、「祈誓」が八例含まれる。

(35) 「もし君にも世にも恨もあり、世に住む力なくは、急ぎて真実の道に入て、我後生をも助かり、二つの親の恩をも送り、一つの蓮の縁と祈るべし。」

(巻一 二六頁)

- (36) 病^{やま}ひの床^{ゆか}に臥^ふして、あまた日^か数は積^つれども、神^{かみ}にも祈^{いの}らず、仏^{ほとけ}にも申^まさず、何^{なに}を食^くい、何^{なに}を用^{もち}いるべき沙汰^{さた}にも及^{およ}ばで、たゞうち臥^ふしたるまゝにて明^あかし暮^くらすありさま、
(巻四 一七六頁)

- (37) 大納言^{だいなごん}は、「いかにもかなうまじき事とおぼゆれば、御所^{ごしょ}の御供^{ごとも}に、今^{いま}一日も疾^{はや}くと思^{おも}ふ」とて、祈^{いの}りなどもせず、しばしは六角櫛^{かくしげ}の屋^やにてありしが、
(巻一 二二頁)

例 (35) (36) は、「同じ蓮台に生まれ合わす縁を祈りなさい。」「神にも仏にも祈らずに、」の意を表し、「祈る」は神仏に祈禱する意の動詞用法である。例 (37) は、「祈禱することなく、」の意を表し、「祈り」は動詞連用形の名詞用法である。

- (38) かゝる悪縁^{あくえん}に遭^あひける恨み忍^{しの}びがたく、三年過^{さんねんか}りに、思^{おも}ひ絶^たえなと思^{おも}ふ。念誦^{ねんじゆ}、持経^{ぢきやう}の祈念^{きねん}にも、これより外の事侍^{こと}らで、
(巻三 一二六頁)

- (39) まづ杜壇^{しやだん}を拜^{はい}したてまつりしは、八幡大菩薩^{はつぱんだいはつさつ}のみなり。近^{ちか}くは心の内の所願^{しよかん}を思^{おも}ひ、遠^{とほ}くは滅罪生善^{めつざいしやうぜん}を祈誓^{きせい}す。
(巻四 二〇八頁)

例 (38) (39) は、「念仏、誦経の祈禱においても、この恋を断ち切ろうと願うのだが、」「近くは内心の願の成就を思い、遠くは罪を滅ぼし善を生じさせることを祈禱する。」の意と解され、いずれも熟語で神仏に関する希望を表し、「祈念」は名詞用法、「祈誓」はサ変動詞用法である。

12、「こふ」の用法

次に、「こふ」の用法を見る。本書に「こふ」は五例見られる。

- (40) その後も度^{たび}くうちしきり、うけたまはりしかども、師親^{しうしん}の大納言^{だいなごん}住^すむ所へ、車乞^{くるまこ}ひて帰^{かへ}りぬ。
(巻一 七六頁)

- (41) 捕^とらへていたるに、「聖^{ひじり}の賜^{たま}びなりし袈裟^{けさ}は」とて請^こひ出^でて、長絹^{ちやうけん}の直垂^{ひたくれ}

の上ばかり着^きて、その上に袈裟掛^{けさか}けて、
(巻一 二七頁)

例 (40) (41) は、「車の支度をお願いして、」「聖からいただいた袈裟を出させて、」の意を表し、「こふ」はいずれも具体的なものを要求する意の一般的な動詞用法である。なお、テキストには異なる漢字「乞」「請」を宛てているが、意味上の大差はない。

13、「もとむ」の用法

次に、「もとむ」の用法を見る。本書に「もとむ」は三例見られ、そのうち熟語「勤求」が一例含まれる。

- (42) 暮^くるゝほどなれば、遊女^{うゐ}ども、契^{ちぎ}りを求^{もと}めてありくさま、憂^{うれ}かりける世の習^{なら}ひかなとおぼえて、いと悲^{かな}し。
(巻四 一六九頁)

例 (42) は、「遊女どもが相手を求めてうろつくさまが、」の意を表し、「もとむ」は前述した「こふ」と同様であり、一般的な動詞用法である。

- (43) 「我^{われ}七歳^{さい}よりして、勤求^{こんぐとう}等^{とう}寛^{くわん}の沙門^{しゃもん}のかたちを汚^{けが}してよりこの方^{かた}、炬壇^{ろだん}に手^てを結^{むす}びて、難行苦行^{なんぎやうくぎやう}の日^ひを重ね、近^{ちか}くは天長地久^{てんぢやうぢう}を祈^{いの}りたてまつり、」
(巻二 一八七頁)

例 (43) は書簡文における用例である。「私は七歳から悟りを求める僧侶となつて以来、」の意と解され、「勤求」は仏教用語で動詞用法である。

四、おわりに

以上、本書における希望表現の構成と用法を考察してきた。本書は院の御所での日々と旅の道中での体験、見聞を内容とする作品であるが、全編を通して仏教との関係が深い。この特徴が希望表現の構成と用法にも反映されている。

希望表現の構成形式には助動詞「まほし」「たし」、終助詞「ばや」「(も) がな」「なむ」、形容詞「ほし」、漢文語法の助動詞「欲」「漢語名詞「願」、動詞「ねがふ」「のぞむ」「いのる」「こふ」「もとむ」が見られ、その構成が多様にわたる。また、作品の前編と後編との間に場面の差と時間の隔たりがあるが、「ばや」「(も) が

な」は前編に多く、宮中での歌を中心にしたやり取りに用いられ、「願」は後編に多く用いられ、西行の姿を追って修業の旅に生きようと願う場面に多く用いられる。その他の構成形式は、分布上の偏りが認められない。

各構成形式の用法については、類義の「まほし」と「たし」が併用されているが、「まほし」はすべて地の文に用いられ、「たし」は地の文と会話文に用いられる。また、「まほし」は希望表現の下位分類の「願望」を「説明」する用法だけでなく、「願望」を直接「表出」する用法も見られるが、「たし」はすべて作者自身の「願望」を「説明」する用法であり、「願望」を直接「表出」する用法が見られない。「ばや」「(も) がな」は地の文、会話文だけでなく、和歌にも用いられ、特に「ばや」の用例の半分が韻文的な場面に用いられる。「ばや」は「願望」を「表出」と「説明」する用法、それに他者に対する「希求」を「表出」する用法が見られるが、「(も) がな」は「願望」を「表出」と「説明」する用法が見られ、他者に対する「希求」を表す用法が見られない。「なむ」は「希求」を「表出」する用法のみである。「ほし」は「願望」を「説明」する用法である。

「欲」は引用する漢文に漢文語法の助動詞として「願望」を「説明」する用法一例のみであり、「欲望」の意を表す名詞用法が見られない。「願」は用例数こそ多いが、用いられ方は単一であり、すべて仏教用語の名詞用法である。

「ねがふ」「のぞむ」「いのる」は動詞用法と動詞連用形の名詞用法が見られるが、「こふ」「もとむ」は動詞用法のみが見られる。また、「のぞむ」「いのる」「もとむ」は漢語として熟語の用法も見られる。

量的にも、用法的にも、助動詞「まほし」「たし」と終助詞「ばや」「(も) がな」が本書における希望表現のもっとも中核的な存在であるといえよう。

【注】

(1) 柴田昭二、連仲友「希望表現の通史的研究序説」『香川大学教育学部研究報告第一部第109号』平成12年3月。

(2) ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」で

あり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、「二人称形式」「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、「三人称形式」「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大辞典』第四巻 岩波書店一九八四年七月第一刷発行。

(4) 注(2) 参照。

(5) 注(2) 参照。

(6) 注(2) 参照。

(7) 注(2) 参照。

(しばたしょうじ
れんちゅうゆう
香川大学名誉教授
広島市立大学客員研究員)

(二〇二二年五月三十一日受理)